

気づきの向こう側

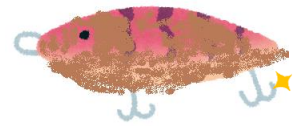
令和2年8月27日（木）

自問清掃通信 第3号

夏休み、ゴミ釣れました

海底を引きずるようにして糸を巻き取ると、急にズシリとした感触が手に伝わってきました。急いで巻き上げると、ボロボロのルアー（魚の形をしたつくりもののエサ）が釣れました。夏休み、堤防で魚釣りをしていたときです。

この釣りあげたボロボロのルアー、よく見るとヘッドがついていてとても汚かったです。誰のかも分からないゴミを釣り上げても全く嬉しくありませんが、持って帰って捨てることにしました。



見えない「誰か」に思いを向ける

私がまだ小さかった頃、今と同じように堤防釣りを楽しんでいました。堤防に座ると、誰かが落としたルアーの針が手に刺さりました。とても痛かったことを覚えています。

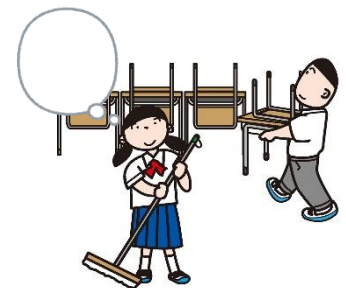
ゴミを放置しておけば、私のように痛い思いをする人が現れるかもしれませんし、次にこの堤防を使う人が気持ちよく釣りをすることができないかもしれません。

この夏休み、顔の見えない誰かに思いを向けることの大切さを改めて感じ、誰のものか分からないルアーを家庭用ごみ袋に入れました。

学校生活で

見えない「誰か」に思いを向けること。学校生活で考えてみると、「図書室の本を次に借りる人」や「来年以降にこの教室を使う人」などでしょうか。公共のものを大切に使用しなければならないことはいうまでもありませんが、それは「次の人が気持ちよく使えるように」という視点からも考えることができると思います。

弥富北中学校の自問清掃では特にそれを感じる人が多いです。景色が映るくらいピカピカに磨かれた廊下や新品みたいにきれいになった黒板に、「気持ちよく使えますように」といった心が置いてあるような気がします。3月や4月の校舎には、卒業してもう学校にいないはずの3年生の心を感じることもあります。



心置きなく掃除をした結果、そこに心を置いていく。それはなんとも美しいと感じます。

（文責：濱田 蒼太）